

萬龜

文由閣竣工

特別号
No. 1

檀信凌会館文由閣



後世との「かわり」を問う

世界は長い歴史の中で創造され、私たちはその上に立って今を生きています。今いるこの場所は、過去に亡くなった人々の行動によって築かれている、つまり私たちは故人の意思の中に存在しているとも言えます。そして私たちもいずれ亡くなり、今度は亡くなった私たちの思いや言葉が、未来を築いてゆくでしょう。

東日本大震災によって私たちは多くのことに気づかされました。ひとつは、故人が残した智慧をもとに、新たな時代をつくらなければならないということ。人は亡くなってもその歴史は必ずこの地に刻まれ、今を生きる人々は、故人を通して未来を考え、同じく故人も今を生きる人々を通して生きづいていくのです。



もくじ

04 住職挨拶骨と未来の約束

06 結の会

祀り方と弔い方の新たな提案

10 瓦谷山 真光寺

12 迦葉山 清流寺

14 平磯山 清凉院

16 文由閣をつくる

18 建築構造「免震構造他」

19 建築環境「パッシブハウス」

20 庭園

22 慈嶽堂天蓋・ロビー天井「別府竹細工」

24 慈嶽堂障子「組子障子」

25 阿弥陀如来像光背・台座「仏像光背・台座」

26 五具足「高岡銅器」

27 鑿子「高岡銅器」

28 仏像厨子・位牌壇「輪島塗」

30 什器前板「和紙」

31 『回向——つながる縁起』展

32 尊厳ある死と両墓制 井上治代

33 新しい技術と寺院建築 五十嵐太郎

34 行持案内（平成二十七年七月〜九月）



東長寺の新しい取り組み——
 まずはその拠点づくりが完了しました。
 2015年6月8日、文由閣竣工。
 皆さまのお越しをお待ちしています。

後生とのかかわり——その問いにひとつの答えを見いだしました。死を未来の生に繋げることです。死を人為の終焉として終わらせず、それが未来世界の種として生きること。新しく提案する両墓制は、この理念を現実のものにしようとする意志を込めています。寺はもはや骨を預かり墓を提供するだけの機関ではありません。寺は故人の営為を環境、地域、社会と結びつけて未来を築く、時代間の媒体であるべきです。

新しい東長寺は、さまざまな取り組みを始めます。その第一歩が、この両墓制を掲げた「結の会」。そしてその拠点である「文由閣」の築造。今、私たちの大きな回向が、始動しました。



萬亀 文由閣竣工 特別号 No.1

発行日：平成27年7月1日

発行：曹洞宗 萬亀山 東長寺

[表紙写真] 浅川敏 | [写真] 浅川敏：p.2-3

住職挨拶 骨と未来の約束

一〇年後の約束をした人がいます。明日や明後日、来週、来月の約束ならば、どなたもされているかと思います。しかしながら一〇年後の約束というのは誰とも出来るものではありません。

八年前、先代が亡くなったときのことです。最期は家族で見送ろうとリビングでテレビを見ていた折に先代は息を引き取りました。山内にいた岡本東堂とともに先代を自家用車に乗せ、病院まで運ぶ際、大人二人掛かりでも大変だったことを覚えています。病院で亡くなったことが確認された後、先代の母を呼び出しました。膝から崩れ落ちるという言葉は聞いたことがありましたが、本当にそうなる人を見たのはそれが初めてでした。

当時、先代は曹洞宗の教化部長という重責を担っておりまして、山内は先代を送る葬儀の準備で息つく間もありませんでした。そのせいか、またあまりに突然の死だったせいか、関係者一同、涙を流す余裕すらありませんでした。私はその時、何の役にも立てずにとただ呆然としていただけでした。

先代が亡くなったのは五十五歳のとき、私は二十四歳でした。私は彼の人生のうち二十四年分を目撃してきましたが、私よりもずっと彼のことを知っている人たちがいました。私の母はその時、すでに三十五年ほど彼に連れ添っていましたし、東長寺の前寺務長は中学の同級生ですから四十五年ほど、そして先代の母である私の祖母は五十五年分の彼を知っていたわけです。

その彼らが涙を流す間もなく迎えた葬儀で、私は彼らが泣かないのに先に泣くのはあまりに僭越だと、ぐっと涙を堪えたのを覚え

ています。私が当時もっと頼りがいのある人間であれば、彼らも安心して涙することが出来たかもしれない。彼らに大きな借りをつつくってしまったと私は感じました。

葬儀が終わり、収骨を済ますと長男である私がそれを東長寺に持ち帰りました。その時、数日前には大人二人掛りでも重たかった父が、片手で持てるようになりました。この骨を大切にするのか、あるいは彼が残してくれたさまざまな記憶を大切にするのか、そこから文由閣の計画は始まっていたのかもしれませんが。

その後、私は祖母と一〇年後の約束をしました。

「あと一〇年後には必ず東長寺住職として一本立ちします。そしてそれが出来た際には、当時私が堪えた涙を大きな声を出しながら流したい。その時には借りてしまったあなたの涙も返させて下さい。一緒に涙を流してもらえますか」

まさか一〇年を待たずしてこのような機会に恵まれるとは思いませんでしたが、この度ついに文由閣も完成し、私も住職の任を授かり一年という月日が経ちました。先般おつとめさせて頂きました先住九回忌法要がその借りを返す機会となるとも思ったのですが、一〇年の約束にはまだ時間があります。まだまだ多くの方の力をお借りしなければ、おつとめできない身分、また少しでも祖母に長生きをしてもらうために、少し先延ばしにしてしまおうかと考えているところです。

住職就任とともに始まりました新たな東長寺の門出に際し、多くの方から心強いご支援を賜りました。先代を映したようなどと、

もつたないお言葉を頂けましたことは誠にありがたいことでございます。しかし、私はどんなに背伸びをしてもまだまだ若輩者、先代を映したのではなく、先代が私を後押しして下さっている。八年前と何が変わったかといえば、野に咲く花のように空の恵みのもと、皆さまから力を頂き、ただただそこに佇んでいただけです。

今後も皆さまからの恵みを頂戴しながら、日々邁進していく所存でございます。自らの行ないや生きた証が、次世代に継承され、今を生きる力となって循環していく。そんな活動を皆さまとともに作り上げたいと、今あらためて強く感じているところでございます。

本年もあと半年ほどとなりましたが、文由閣が完成し、東長寺では今後さまざまな行事を執り行なわせて頂く予定でございます。万障お繰り合わせの上、東長寺ならびに、新堂・文由閣にぜひ一度ご参詣頂けますよう、山内一同、心よりお待ち申し上げます。

合掌

東長寺住職

瀧澤遙風

結ゆいの会… 祀り方と弔い方の新たな提案

文由閣の竣工と同時に、葬制を会員制度で支えてゆく「結の会」を発足いたしました。この会ではふたつのお約束をいたします。遺骨を埋葬すること。永代供養をすること。遺骨は参り墓と祀り墓に分骨いたします。参り墓は文由閣龍樹堂の納骨堂、祀り墓は地方協力寺院の樹林葬墓苑もしくは、東長寺合葬墓・多宝塔です。埋葬と供養は、今に生きる私たちすべてが考えなければならぬ問題であり、同時に社会の課題でもあります。東長寺は「結の会」という方法でそこにひとつの答えを見いだしました。

葬制の現在形

死後の宗教儀礼や墓のあり方を含めた「人間の死にまつわる習慣や慣習」—— 葬制といいますが、これにはふたつの側面があります。ひとつは遺体の処理や遺骨の埋葬など、物質的な面。もうひとつは看取りや葬儀、弔いや供養などの精神的な面。このふたつの大きな取り組みを、ご遺族が同時期に進めなければならないところが、葬制の一番の課題です。

葬制の内容は端的にいうと、「葬儀」と「墓」と「供養」です。「葬儀」には儀式と火葬が含まれますが、それは精神的側面と物質的側面の両方が組み合わさったものです。この葬儀の儀式は、その後の供養（弔い方）に、火葬は墓（祀り方）に繋がります。今の時代、ご遺族が葬儀、墓、供養をどうするのか決めるにあたって、家の慣習、故人や自身の宗教、親族他さまざまな人間関係、社会環境などをごく短期間に判断しなければなりません。一昔前は、故人には近くに家族や親

族がいて、菩提寺もあり、隣近所が葬儀を取り仕切るという風習がありました。現在の都市では、あるいは地方でもそのような状況は少なくなり、新たに考えてゆかねばなりません。

多死社会における課題——これからの祀り方、弔い方

社会の変化を受けて、葬制つまり祀り方と弔い方が昔と変わってきました。いくつか例を挙げますと、

- 一 家族形態の変容
大家族から核家族化することによって、新しい墓が必要になってきた。
- 二 人口移動の問題
地方から都市へ人口が流入することによって都市人口が急増し、それにと
もない墓地も増加した。
- 三 個人化への対応



文由閣の納骨堂——龍樹堂(4階)。

結婚しない、あるいは少子化にともなう個人化によって従来の墓制度では対応できなくなりつつある。

四 宗教への不信

さまざまな宗教における事件などが相次ぎ、宗教への不信が増したことによって、寺墓地(入檀)が減少し、一方、無宗教墓地が増えている。

五 祭祀の継承

祭祀を継承する行為、あるいは祭祀自体に意味を見いだせなくなっている。

このような社会の変化に対して、公営墓地や寺院を含む民間墓地は、祀り方・弔い方に多様性をもたせることで対応してきました。たとえば、遺骨を個人単位で受け入れ可能にしたり、無宗教でも寺院墓地に受け入れたり、屋外の墓地から室内の納骨堂へ場所を変えたり、そして樹木葬を行ったり。そのとき問題なのは、「形式」ではなく、「思想」です。亡き人の遺骨の処理と、弔いの本質的な意味を深く考え、議論することが重要です。それは、人間の存在を問う超越的な問題でもあれば、私たちがいま生きている現代社会とのかかわりを問う問題でもあります。遺骨を埋葬する墓や納骨堂の不足をどうするか。少子



東京都新宿区四谷・東長寺。
本院(左)と文由閣(右)。

化が進む日本で遺族が弔うことの限界をどうするか。遺族無き後の供養は誰がするのか。現代日本の葬制はどうあるべきでしょうか。

都心では墓地を設ける土地不足が問題となり、墓は屋外の墓地から室内の納骨堂へと移ってきました。しかし、納骨堂に移り省スペース化することで、限られた数の遺骨しか受けられなくなりま
す。一方必要な墓の数は以前にも増して増えています。それは出生の減少や離婚の増加による後継者不足から個人墓が増えていること。また高齢化における多死などの社会傾向によるものです。したがって納骨堂すら不足してすることも想定されます。そんな中、残念ながら遺骨はその場で破棄し、墓をつくらず葬儀もつとめないといった直葬を選ぶ方が増えはじめました。都心は場所がないから、遺骨の管理は難しいから——それで良いのでしょうか。東長寺はそのひとつの解答として、「結の会」という新しい葬制を提案します。それは両墓制を設け、都心の墓地不足問題と供養のあり方について提案した新しい葬制です。

現代版両墓制への展開

ひと昔前の日本では、墓のもつ埋葬と供養の二つの役割を、分けていることがありました。埋葬を人里離れた場所で行ない(埋め墓)、供養のための石塔墓地を人の住む近くや寺院境内につくっていたのです(参り墓)。これは両墓制といって、主に近世以降に見られるものです。理由はおそらく、死穢を嫌うこと、遺体への恐怖、遺体の臭気を避けるためであったかもしれません。埋め墓を設ける昔の両墓制は、忌避や諦めなどの消極的な動機から始まったものようです。

しかし日本の両墓制を再考して、現代に活かそうとした人たちがいます。本誌にコラムを執筆されている井上治代氏を中心としたグ

ループです。一九九一年頃、両墓制を実現しようと活動していましたが、これは古来の両墓制とは違い、地方に「埋め墓」、都市に「参り墓」をつくって、墓が都市へ一極集中するのを解消するのが狙いであったと井上氏は述べておられます。そして今、東長寺結の会も、この両墓制に新たな解釈を加え、新しい両墓制のあり方を実現しようとしています。墓の都市への一極集中を避けるという狙いもひとつですが、弔いをより身近なものにすること、さらには環境、地域、社会とのかかわりを生み出そうという大きな理念があります。

本来、墓参りや供養というものは年に一度地方に戻ってするようなものではなく、もつと生活に身近にあるべきものです。いつでもお参りできる都心の文由閣に「参り墓」を設けることで、本来生活に身近にあるべき故人とのつながりを強めます。

同時に東長寺と縁の深い地方の協力寺院(現在の予定としては千葉県真光寺、佐賀県清流寺、宮城県清涼院)の境内に埋葬され(祀り墓)、その場所を含む周辺環境を保全してゆきます。入会者の入会金の一部が、協力寺院、および東長寺と協力寺院が進めるさまざまな地域支援活動金になっていきます。都市の寺院、住民、自己のことだけを考えるのではなく、地方の寺院そしてその周辺地域、他己の地域創成を視野に入れた新しい葬制と考えています。

新しい墓の形——樹林葬(祀り墓)が問いかけるもの

墓には遺骨を埋葬する(祀る)という物質的な面と、亡き人を供養する(弔う)という精神的な面の両面がありますが、それは納骨堂も同じです。

しかし樹木葬は、見かけが墓や納骨堂とは違うだけでなく、その本質から違っています。一般に樹木葬とは、火葬した遺骨を土中に

埋葬し、その周辺に記念(祈念)となる樹木を植えて墓標にするものです。しかし日本各地の樹木葬がそうしているとは限りません。一本のシンボルツリーの周りに埋葬する方法、里山の木々が既に立っているところに埋葬する方法、またこれまで同様墓石を建ててその周りに花を植える方法などもあり、乱立状態になっています。どうしてこのような状況になったのでしょうか。

樹木葬墓苑は、「樹木葬をすることによって、その場所を含む周辺環境を保全してゆく」という理念をもっていたと東長寺は評価します。しかし、マスコミ各社がこの樹木葬を「新しい葬送の形」だと喧伝したことによって、形を真似て本質が忘れ去られたものが多く登場しました。もちろん環境保全だけが樹木葬の目的ではありません。墓石をもたず自然に還るといふ考えや、子孫を頼る家族墓からの脱却という個人の生き方に根ざした理念があります。しかし、都心の洋風ガーデンを樹木葬と呼ぶような現状を見ると、樹木葬墓苑という言葉が理念をもたない「消費」の対象になっているように見受けられます。東長寺で行なう樹木葬は、単なる自然志向から記念樹を植えるだけではなく、そこから環境、地域、社会とのかかわりが生まれるということに期待しています。そこで東長寺では広く環境を意識する「樹林葬」という言葉を使います。

このように、結の会は両墓制をもって、現代の葬制の課題——物質的な課題(墓骨)、精神的な課題(供養申し)を解決することを提案します。と同時にこの新たな葬制は、故人は死してすべて終わりではなく、生前の営為を現代社会で受け止め、それが未来で現実に実を結ぶ種として生かす——その時空を超えた回向のひとつと考えています。

次ページから、この両墓制のひとつ、地方寺における樹林葬計画のご紹介をいたします。



現在、千葉県真光寺で募集を行なっている樹木葬墓苑。東長寺結の会会員の埋葬地は、この敷地の上部にあります。

樹林葬

瓦谷山真光寺

袖ヶ浦市川原井

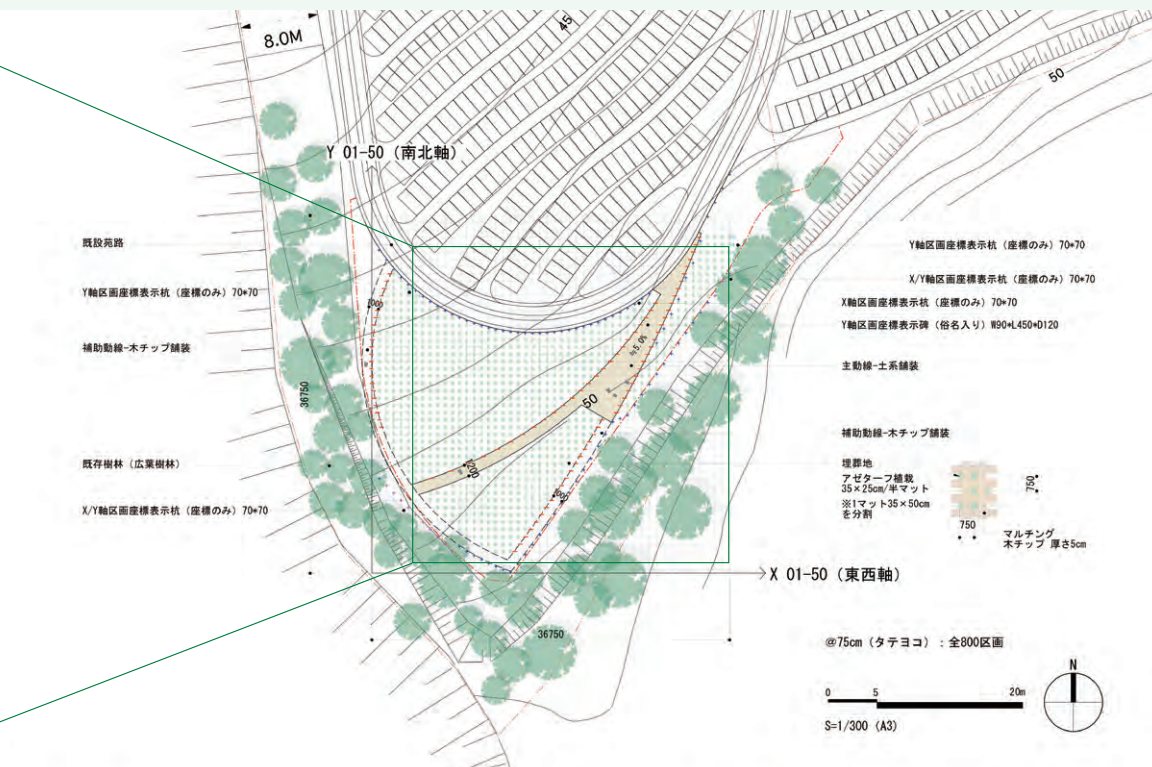
人が手をかけ、暮らしを立てることで、生物多様性が生まれ、豊かな生態系が育まれるのが里山です。近代化の後、人が去ることによって、意外にも自然が壊れてゆきました。しかし大昔の経済活動に戻るわけにはゆきません。そこで、墓苑として手をかけることで、里山も再生しようというのがこの真光寺の樹林葬です。

里山の裾野に広がっている大地に遺骨を埋葬した後、その上に記念の野の花を植えます。多年草ですから毎年花が咲き、繁殖してじわじわと広がってゆきます。ひとつ樹林葬が増えるごとに、大地は野原になってゆきます。里山の林縁とは、かつてそんな野原の広がる生態系

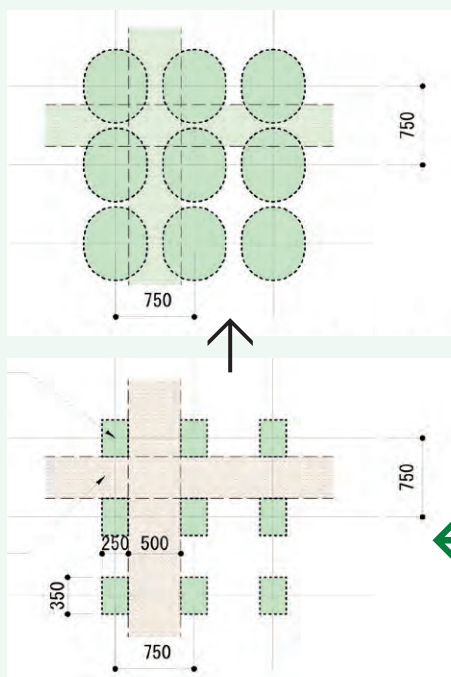
系豊かなところでした。年を経るごとに、里山の風景が蘇ってくるのではないでしょうか。



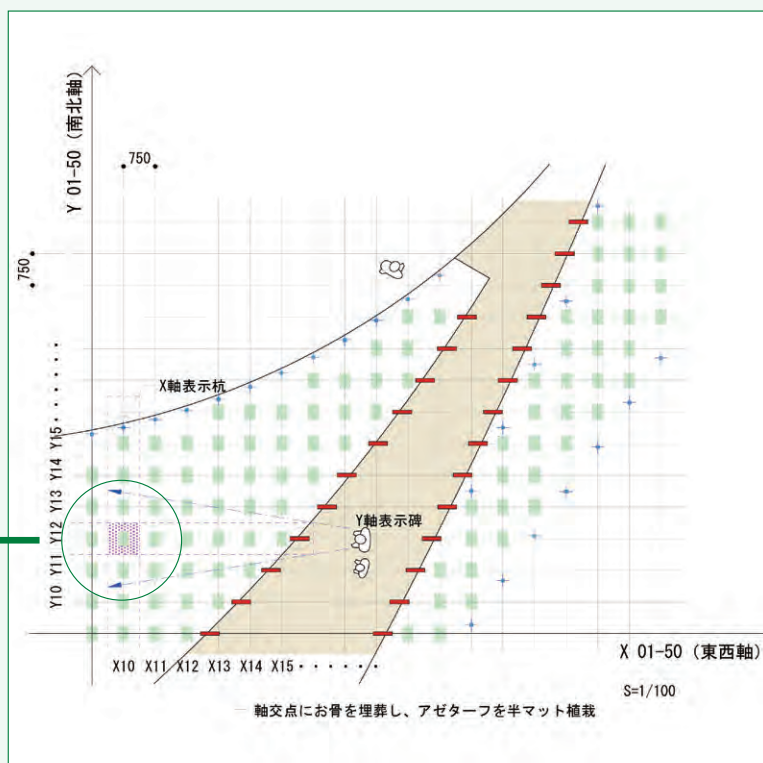
里山の再生を目指す 樹林葬



真光寺・樹林葬の敷地図。広い大地を計画し基盤の目状に計測。垣根や境界線はなく、杭とお名前を記す表示碑の交点が埋葬地点。遺骨を埋葬した後、野の花を植栽します。埋葬箇所が増える度に、土の大地が野原に変わってゆきます。



樹林葬敷地拡大図。最初は四角く野の花が植栽されます。種類はオミナエシ、キキョウ、カンゾウなど日本古来の多年草。毎年花を咲かせて少しずつ繁殖し、やがては上図のようにじわじわ広がってゆきます。



樹林葬敷地拡大図。園路沿いに表示碑(図の赤部分)を打ち込む。1つの碑に18名まで刻印。このお名前のある列に、故人が埋葬されます。

樹林葬

迦葉山 清流寺

かしようざん せいりゅうじ

佐賀市三瀬村

みつせ

玄界灘に面する福岡と有明海に面する佐賀。二つは霊山脊振山^{せふりさん}を背中合わせに隣合う地域です。この山系には三瀬峠があり、閑静な山里が点在します。

修験道の聖地と県立自然公園を間近にもつこの山合いを整備し、豊かな山里を次世代に繋げようというのがこの清流寺の樹林葬です。

清流寺の墓苑はかつて山を切り

開き、ひな壇状に開発しました。

現在の計画では、これをなだらかに

馴染ませ、樹林や多年草の野の花を

植えて、徐々に本来の山里の姿に戻

してゆきます。緩やかな園路を上り、

散策できる山里です。埋葬地はこの園

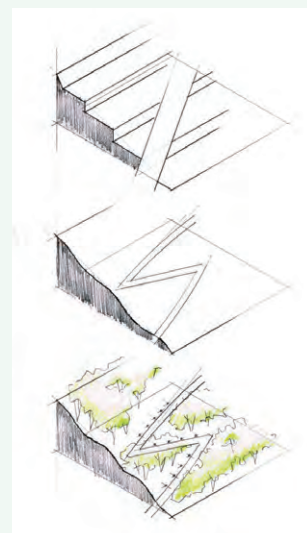
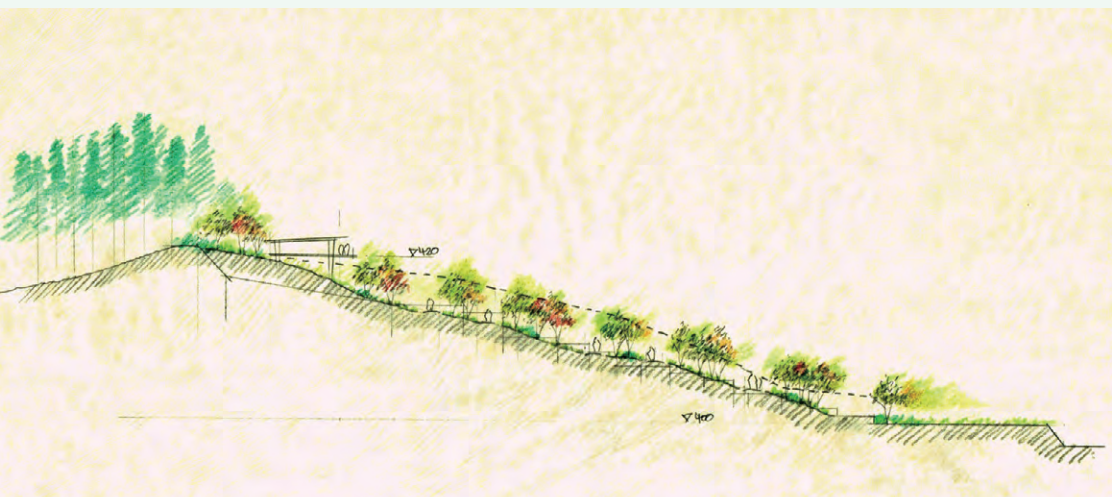
路に沿って設置。埋葬地の上には、お名前の

刻印された表示碑を埋め込む予定です。



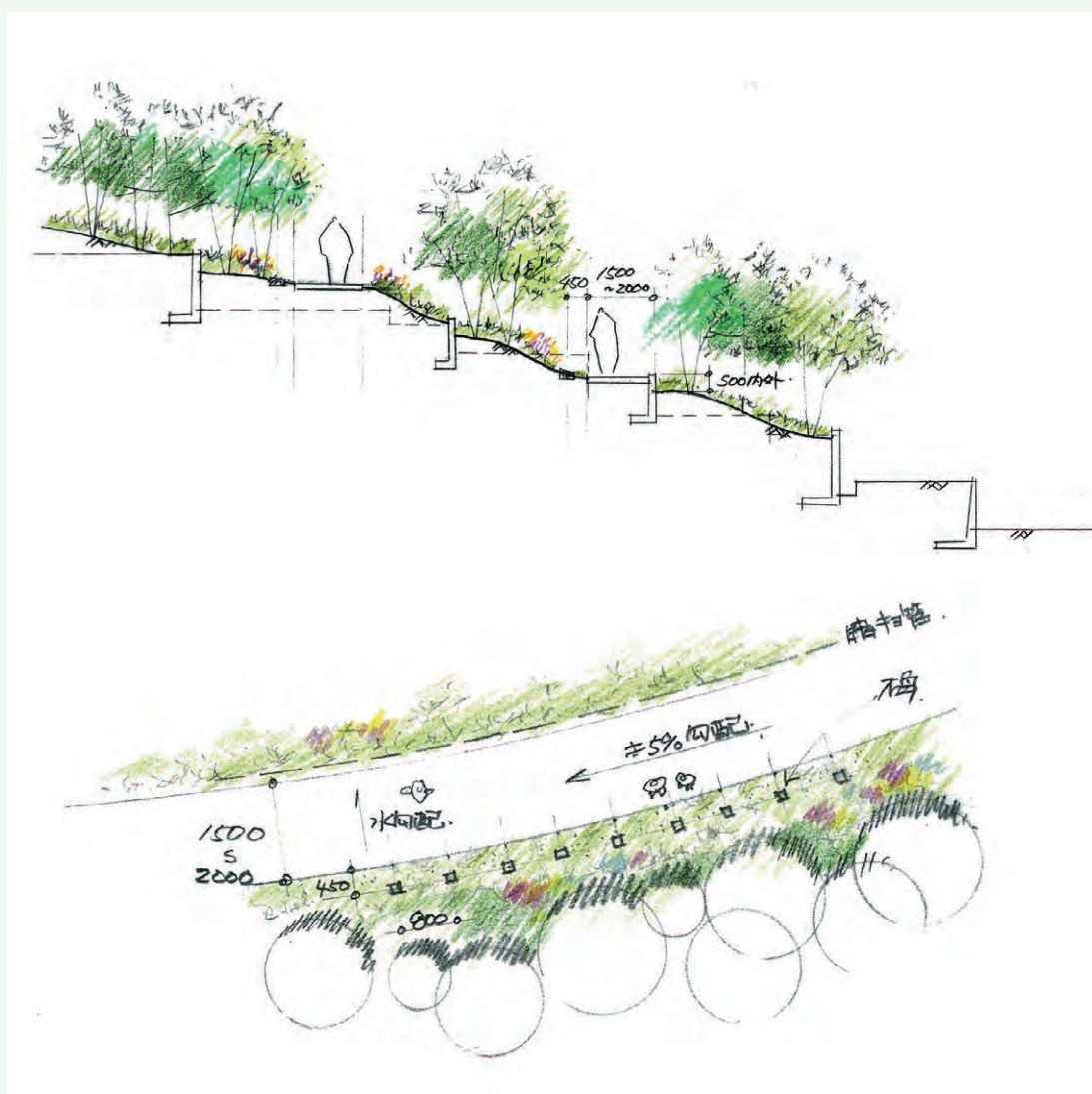
〔計画イメージ〕





樹林葬敷地断面図。現在のひな壇状の斜面を、徐々になだらかに戻してゆきます（計画イメージ）。

福岡と佐賀に通じる 閑静な山里の樹林葬



樹林葬敷地拡大図。緩やかに山を上る圖路の山側に埋葬地を約80cm間隔で点在して設けます（計画イメージ）。

樹林葬

へいきさん せいりょういん 平磯山 清涼院

気仙沼市本吉町 もとよし

東日本の国立公園では唯一ともいえる本格海岸公園である、三陸復興国立公園。その美しい景勝地間近の丘を上げると、清涼院が迎えてくれます。

この地には所々コナラやブナなどの広葉樹の群落が点在していますが、かつてはそれらがもっと広がり多様な樹種の混交する里山でした。しかし他の地域同様、ここもスギ、ヒノキの植樹がなされたものの、その管理が課題となっています。丘の上に建つ清涼院も、境内の斜面に立派なスギ林があります。現在の計画では、その林ごと樹林葬として整備。水平に広がる海岸とは

一変して、天に伸びるスギ林の木立を散策する園路に沿って、樹林葬の埋葬地が設置される予定です。



美しい海岸の景勝地を 眼下にひかえる丘の樹林葬

中右：清涼院周辺の植生調査。
濃い緑がコナラ群落。黄緑がスギ・ヒノキ植樹。

中左：清涼院の丘を下り、しばらく歩くと辿り着く三陸復興国立公園の海岸。

下：清涼院本堂前から見下ろす参道。スギの木立が樹林葬の計画敷地。

【写真】清涼院 (p.14上)

田淵睦深 (p.14中段左および下)

【図版】霜田亮祐 (p.14中段右)



清涼院境内スギ林の樹林葬計画敷地。樹林を整備し、園路を設けます。

文由閣をつくる

p.24

慈嶽堂障子

組子障子 | 建具の遠藤
[石川県七尾市]

日本の障子、
その究極の進化形



p.27

鑿子

高岡銅器 | 島谷好徳
[富山県高岡市]

銅器を楽器に進化させる

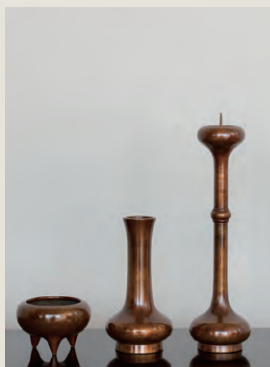


p.26

五具足

高岡銅器 | 折井宏司
[富山県高岡市]

化学を手技で極めるアート



p.20

庭園

庭園 | 霜田亮祐

その土地の風土に
想いを寄せる庭



二〇一五年六月八日。檀信徒会館「文由閣」が竣工しました。東長寺はこれから新しい取り組みを始めますが、文由閣の完成がまず第一歩です。この建築が新しい活動拠点として、またその活動の象徴として広く知られる場所にしてゆきたいと思っています。

文由閣は内装や仏具を含め、多くの人の手によってつくり上げられてきました。誰もが第一線のものづくりをするプロフェッショナルです。今回のつくり手皆に共通するのは、ある型を極めながら、その型を超えようとしていること。高い技術を受け継ぎながらそこに安穩とせず、時代に合わせて挑戦を繰り返す人たちです。

ここでは文由閣がどのようにつくられたのかを見ながら、彼らのものづくりの一端をご紹介します。そしてこれこそ、東長寺の新しい取り組みのひとつ、ものづくりの担い手支援の始まりです。

p.18

建築構造

免震構造・他

地震の揺れを
建物に伝えず
建物を地震から
守る技術



p.19

建築環境

パッシブハウス

森みわ

機械に頼りらず、
躯体のデザイン力でも
省エネする



p.25

阿弥陀如来像 光背・台座

仏像光背・台座 | 吉田源之丞老舗
[京都府京都市]

百年鑑賞するための技術



p.22

じがくどうてんがい

慈嶽堂天蓋・ロビー天井

別府竹細工 | 大橋重臣 [大分県別府市]

人の手技で生まれ変わる植物の美しさ

p.30

じゅうきまえた

什器前板

和紙 | 前田崇治 [佐賀県唐津市]

新しい紙の風合いをつくる



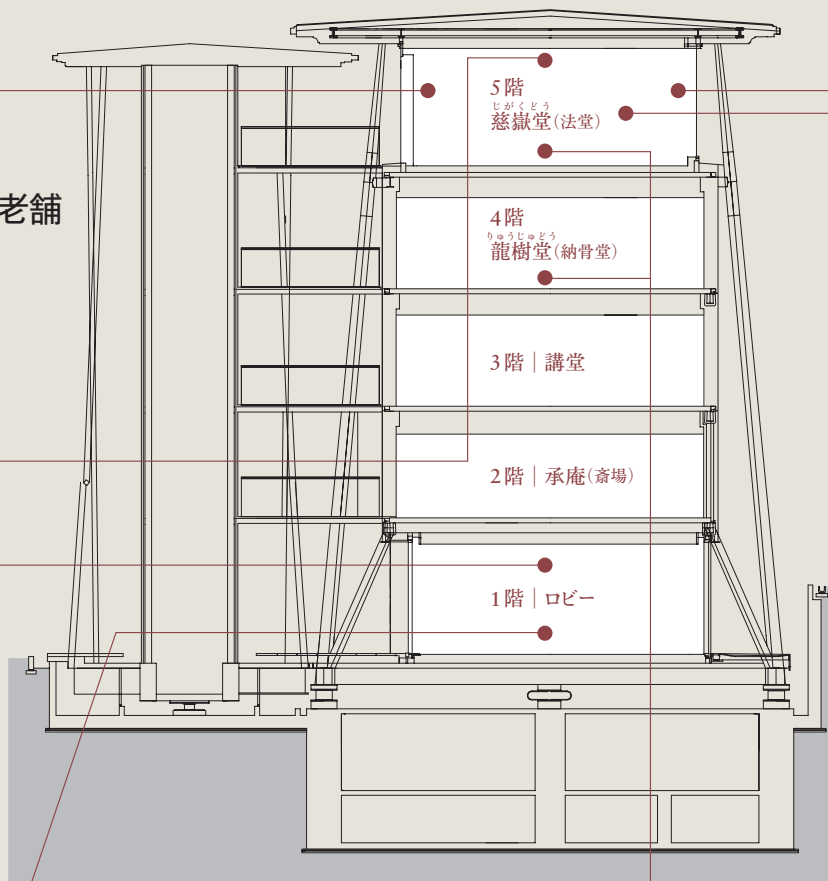
p.28

ず し いはいだん

仏像厨子・位牌壇

輪島塗 | 輪島屋善仁 [石川県輪島市]

輪島塗史上最大級。器の技術が次世代の空間を生み出す



文由閣の構造

建築構造—免震構造・他

文由閣の建築デザインには斬新さがあります。窓の無い胴体、その周りを囲むX字柱、その柱が支える帽子のような屋根。威厳があると見る人もいれば、可愛いらしく見える人もいるでしょう。この独特な意匠には、理由があります。それは現代の課題に挑み、新しい時代をつくろうとする建築設計の意志の現れです。

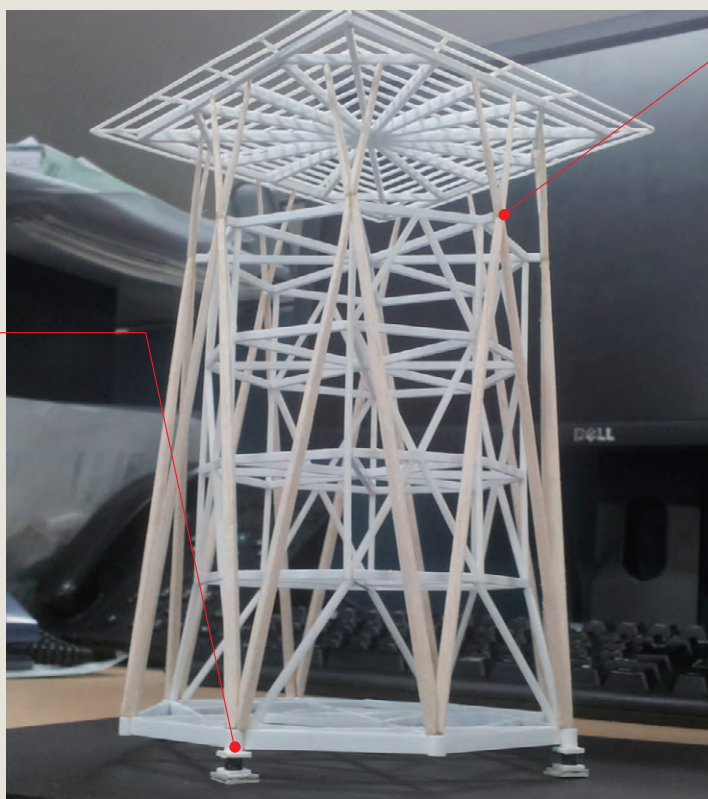
漆喰で塗られた建物の外壁を囲むX字の外周柱は地上から直接屋根を支えるために天空へ伸びています。外壁と内壁の間に柱を納めることで室内は無柱としました。空間の使い方を自由に変えられるので、結果として建物を長く使っていくことができます。

地震への備えは、長く信頼できる建物であるための必須条件です。ここでは地震の揺れを建物に伝えない免震構造が採用されました。外からは見えませんが、地上の柱の足下にはそれぞれ免震装置が設置されています。

地震の揺れを建物に伝えず 建物を地震から守る技術

免震構造

柱の足下に積層ゴムを設置し、地震の振動エネルギーをダンパーが吸収しています。中小地震からエネルギーを吸収するオイルダンパーと大地震時のエネルギーを吸収するスチールダンパーの2種類を設置。地震の揺れを建物に伝えない構造です。



文由閣構造模型。鉄骨造のスタディ。

外周柱

屋根を支える、メインの鉄骨柱。X字型の接合部には鋳鋼品が使われている。



外周柱のX字接合部。

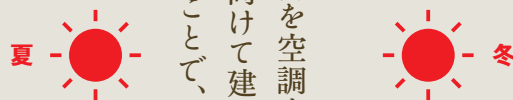
建築環境 — パッシブハウス

キーアーキテクト／森みわ

現代建築の最大の課題のひとつが省エネです。室内を空調するため多くのエネルギーを浪費する建物を、未来へ向けて建てるわけにはいきません。躯体をうまくデザインすることで、省エネする技術をパッシブハウスと言います。ここではそのノウハウが活かされました。

躯体をどうデザインするのか。ポイントはいくつあります。それは太陽と風に素直な設計にすること。そして熱の出入りが少ない構造にすること。

たとえば夏の日差しを部屋に入れず、冬の日差しを部屋に入れる——そのためには季節の太陽高度を計算し、軒の出を決めると良いのです。また断熱が重要です。壁に断熱材を入れるのはもちろん、アルミサッシが熱を伝えるのを防ぐため、室内では木製部材でこれを覆います。空気温度だけ考えてはいけません。建物の躯体、壁の



熱や冷たさが、輻射熱となって身体に負担をかけます。宗教建築での空間体験は特に大切なもの。上質でストレスの無い環境をつくること、何より重要で、それを省エネで実現しようとしています。

太陽に素直な設計をする

夏の高い日差しを遮り、冬の低い日差しを採り入れる軒のデザイン。



熱の出入りを少なくする

5階

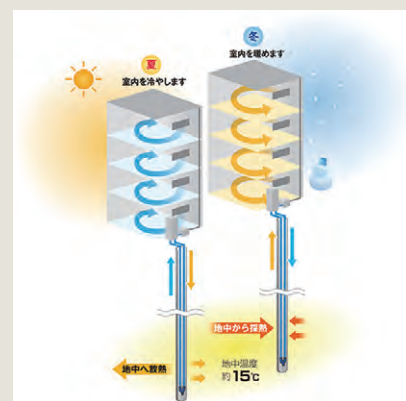
断熱性能の高いペアガラスを使用。
アルミサッシは内側を木材で包む。

2-4階

熱が出入りしやすい窓を無くし、
躯体の外側をすべて断熱材で覆う(外断熱)。

1階

断熱性能の高いトリプルガラスを使用。
アルミサッシは内側を木材で包む。



地中熱利用

地中の温度は年間を通じて変化が少ない(夏は外気より低く、冬は外気より高い)。この温度差を利用して、地下深く埋めたチューブを循環させる冷媒の熱で、冷暖房を補助するもの。夏はエアコンが室内から集めた熱をこのチューブで冷やし、冬はチューブの熱でエアコンを暖めるという原理。

機械に頼りきらず、 躯体のデザイン力でも 省エネする

文由閣の庭園

庭園

HUMUS landscape architecture Inc.

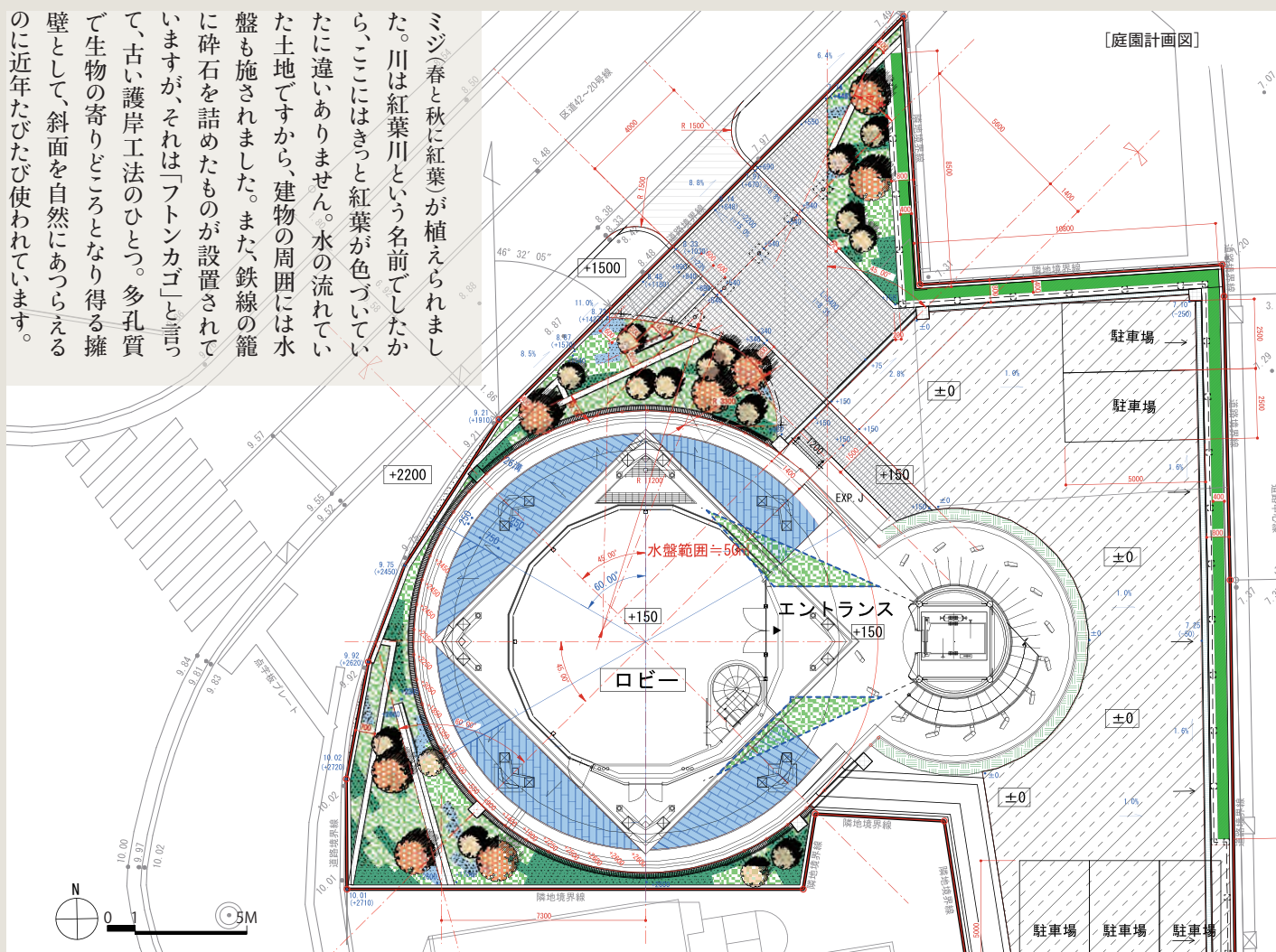
千葉大学園芸学研究科准教授／霜田亮祐

文由閣はかつての紅葉川、明治初期には蓮池になっていた水辺のほとりに建っています。前の道路がちょうど岸辺のあたりでしょう。そこから見下ろした、文由閣の向こうに広がる一五〇年前の、のどかな蓮池が想像できるでしょうか。都市はかつての地形を忘れてきました。大地を再び意識したい——そう願って計画された庭園です。

文由閣が面している大きな外苑西通りとそこから脇へ入る小道。そのあたりから見下ろす場所に蓮池がありました。かつてこの土地は紅葉川という川のはりだったのです。その地形や場所のもつ性格を少しでも意識できるような庭園が計画されました。かつて岸辺であつたろう小さな斜面が、文由閣の庭園です。植栽するのは野の草花と紅葉。都会でも雑草は生えています。その多くが繁殖力の強い外来種。

関東の生態系ではありません。ここで植えるのは、武蔵野の大地で見られる典型的な草花——オミナエシ、キキョウ、カンゾウ、……。それらがマット状のものに植え込まれ、地面に置くだけで植栽できる(有)仲田種苗園の「野の花マット」というシステムを活用しました。川端のように湿度が高く、少し陰のある土地には楓が適しています。ここでは三種類の楓——イロハモミジ、コハウチワカエデ(切れ込みの少ない小さな葉)、ノムラモ

〔庭園計画図〕





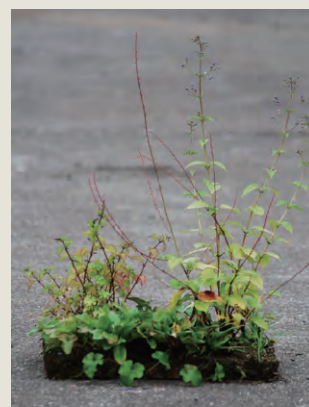
上：文由閣庭園。岸边であったであろう斜面。フトンカゴと大きな石がしつらえられている。
下：文由閣庭園。入口周辺。手前の水盤は宮崎県の「鬼の洗濯岩」といわれる海岸地層からヒントを得たもの。水量が減っても味のある景色になる。



その土地の風土に 想いを寄せる庭



上：明治9-19年の文由閣周辺。蓮と書かれたところが蓮池。茶と書かれた茶畑も広がっている。出典：明治前期測量中央官衙町2000分1彩色地図（財団法人日本地図センター）。これに重ねて現在の道路位置を加工処理。
下：現在の文由閣周辺。



「野の花マット」。田んぼの畦に生えているような畦の草花をマットに植え込んだ製品。このマットを敷くことで、公園や庭などにかつての植栽を再生し、生物多様性を目指した緑化ができる。
製作：（有）仲田種苗園

文由閣の天蓋・天井

慈嶽堂天蓋・ロビー天井ー別府竹細工

オオハシ・バンブー・ワークス／大橋重臣@大分県別府市



「荒割り」の工程。直径8cm、長さ3mほどのマダケを割り、幅6.5×厚さ4mmの竹籤(たけひご)をつくる。節があっても同じ幅に割り続けるのが難しい。

私たちに馴染みの深い、籠や箆などの竹細工が、大きな天井となつて生まれてきました。竹のしなやかな美しさと編みの巧妙さに目が奪われます。決して合成樹脂ではできません。竹の命の躍動がこの素材に結実し、そこに人の手技が込められ生まれてきた、工芸の姿がここにあります。

竹細工は、竹を細く割った籤を編んで籠や箆をつくる伝統工芸。その編みの技術を応用してつくられたのは、大きな天井です。天井を覆う竹籤の編み模様が圧巻。模様は波紋のようにも、花のようにも見え、どこか既視感がありながら、初めて遭遇する造形です。複雑な模様ですが、編み方を尋ねるとシンプルでした。花や雪の結晶が、実は簡単な法則で生まれている自然界の理を彷彿とさせます。

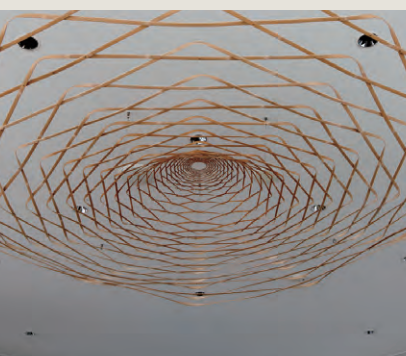
しかしその製作工程は一筋縄ではいきません。竹細工は、籤材を綺麗に綿密につくる下ごしらえが六割を占めるといいます。籤づくりは、幅と厚みを均一にする工程ですが、機械化ができません。節があるからです。節を削ると極端に強度が落ちるため、これを活かしながらうまく処理します。その技を覚えるまでに五年はかかるということです。

慈嶽堂天蓋の中央部分は天に上昇するように盛り上がっていますが、この形は特殊な方法でつくられました。まず中央部分のパーツを山型の治具に釘打ち固定。それを温泉の蒸気で蒸し上げました。竹は熱で曲げてクセをつけます。別府には「地獄蒸し」という、温泉蒸気で食品を蒸す伝統がありますが、その釜を利用したのです。天蓋中央部分の他は籤材のまま文由閣に搬入。竹を編む作業は、それぞれのお堂で行なわれました。日用雑貨のサイズであつた竹細工が、建築内装へと分野を広げる試みでもありました。

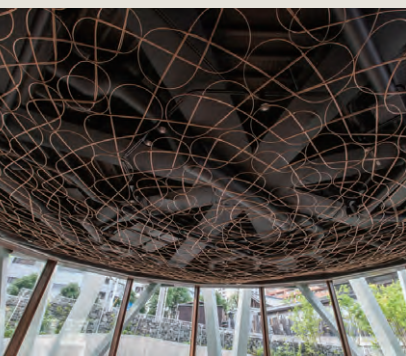


大きな作品なので、山寺の本堂を活用した広い工房で製作された。ここは製作協力者の中村さんの工房。

大きな作品なので、山寺の本堂を活用した広い工房で製作された。ここは製作協力者の中村さんの工房。



慈嶽堂天蓋。



ロビー天井。



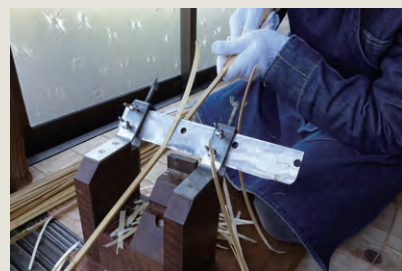
治具に取り付けた慈嶽堂天蓋中央部分を温泉蒸気の噴き出す「地獄蒸し」に入れて、形のクセをつける。



人の手技で生まれ変わる植物の美しさ



ロビー床で編んだ中央部分をまずは天井に設置。さらに周囲を編み足してゆく。



「裏すき」の工程。「厚引き銚(せん)」で簾の厚みを削り均一に整える。



ロビー天井の中心部分。工房で仮組みをする。



慈嶽堂天蓋中央部分を山型に成形するため、治具に取り付ける工程。

別府から近い山里の竹林。職人が使う材料が切り出されている。竹林はこれからさらに手がかけられてゆく。

左：大橋重臣さん、右：製作協力者の竹アーティスト中村さとみさん。

文由閣の建具

慈嶽堂障子じがくどう—組子障子くみこ

建具の遠藤@石川県七尾市

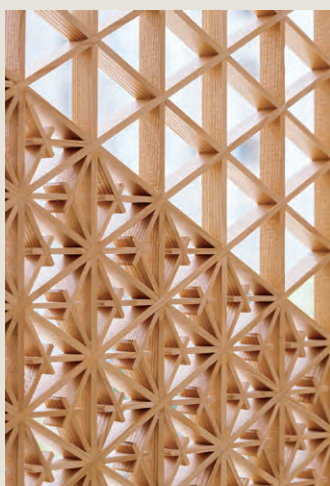
障子の格子を高度に組んで、模様を生み出したものが組子くみこです。杉や檜の棒材を合あ欠いきして組んでゆく伝統の技は繊細を極め、格子で絵を描けるほど。幾何学と精緻な手技が、日本の建具を常に進化させ、新しい空間を生み出しています。

木製建具は日本人の生活に欠かせないものでした。長屋の引越しては、家財とともに持ち運ばれたと言います。建具職人は身近な存在で、どの地域でもその腕を競い合っていたことでしょう。その技術の一端は、障子の棧の意匠に注がれました。普段見るのは、シンプルな格子に紙張りの障子ですが、その棧さんを細く密に組んだり、斜めに組んだりしながら複雑、華麗に進化してゆきました。そのような障子を組子障子と言います。今なお受け継がれるこの技術で、慈嶽堂の障子が製作されました。

組子は、組手くみてと呼ばれる合欠き加工をした棒材を組みます。一般

的には直角に組みますが、斜めに組んで菱形にしたり、さらにもう一本加えて三角形にする三組手みつぐてもあります。慈嶽堂障子では、下半分で三組手が使われました。その三角形の格子の内側に、「葉っぱ」と呼ばれる短い木片を組むことで、さらに複雑な模様にしてゆきます。組子は誤差の許容が〇・二ミリ以下という、繊細な技術。省力化のために機械を使うものの、その機械の微調整にも匠の技が必要でした。正確さと匠性を求めて、進化を続けている工芸です。

日本の障子、その究極の進化形



慈嶽堂障子。



棧の仮組み立て。



棧の仮組み立て。



棧の素材。杉材を1,800×15×4mmの細長い棒材にしたもの。



棒材を正確な角度で細かく切断して部品に仕上げる機械。

文由閣の仏像

阿弥陀如来像光背・台座 仏像光背・台座

よしだげんのじょうろうほ
吉田源之丞老舗@京都府京都市

木彫は八〇―一五〇年で修復が必要と言われます。それは接着剤である膠が六〇―八〇年でボケてくるから。現在修復されているものの多くは、江戸期に手が入れられているそうです。時として、ライバルは別の時代にいるのが職人の世界。ここでは現代の職人が、江戸の仕事を確認しながら、それに劣らぬものを残そうとしています。



光背の箔押し。



台座の部分。



台座の箔押し。蓮弁部分。



台座の箔押し。反花(かえりばな)部分。

ニューヨークから戻された阿弥陀如来像には、光背や台座がありませんでした。歴史をくぐり抜けてきた仏像には、往々にしてある状況です。そこでそれらを復元することにしました。しかし資料が無いので、仏像の彫り方から年代を推定し、形や様式が決まりました。仏像の様子からこれは平安時代後期のもの。そこで当時の文様である「雲透かし」が、光背のモチーフに選ばれました。この模様は宇治平等院の仏像にも使われています。台座はこれも同じ時代の「大仏座」様式。框の上に反花・蓮弁が重なったものです。原寸で下絵を描いたのちに、まず木地師の仕事が始まります。三つの檜材を寄せ木し、荒彫りの後、最後に透かしを入れてくり抜き抜き仕上げます。次に箔漆を塗る漆職人、その上に箔を張る箔職人の手を経てゆきます。箔は空気のコンディションが変わると仕上がりが変わるため、天候を見ながら毎日同じ時間帯に作業が行なわれました。すべて京仏師による繊細な技術の連続です。京の箔は落ち着きのある輝きが特徴。実は修復して二年経つ頃の方が、さらに落ち着きが増した、いい色になるのだそうです。



光背の原図。

[写真] 浅川敏 (p.24左列2点、p.25下段左) / 吉田源之丞老舗 (p.25上および中段3点・下段右)

百年鑑賞するための技術

文由閣の仏具

五具足——高岡銅器

モメンタムファクトリー・〇エー／折井宏司
@富山県高岡市

銅器は鍍を鑑賞する工芸と言われます。この場合、鍍は劣化ではなく逆に腐食させないための表面加工。銅は鍍の種類が豊富で、最も発色の変化に富んだ素材なのです。化学変化で発生する金属の表情が、モノへの馴染みややさや愛しみの情を生む、奥深い工芸です。



五具足のひとつ、香炉を鉄漿（おはぐろ）で着色する工程。バーナーで焼き加熱しながら、米酢に鉄屑を混ぜて寝かせた溶液を刷毛で塗ってゆく。茶褐色系の色を出し、独特の様が生じる。

慈嶽堂五具足の色模様は目に馴染み、時の重なりも感じさせる味わいがあります。それでいて初めて見るような発色。それこそが、高岡銅器の着色の技です。

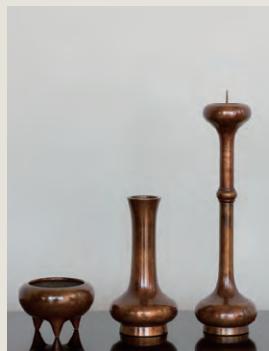
古来より錫との合金である青銅が使われ、自然に発生する鍍、緑青の色がその典型でした。ある種の鍍は、金属の腐食を防ぐ保護膜の役目を果たします。と同時に、金属器の表情を生み出す手法にもなります。高岡銅器の着色とは、さまざまな鍍（酸化皮膜）を化学反応で発生させる操作のことで、それが伝統工芸として受け継がれてきました。伝統的な着色法がいくつかあります。製品に大根おろしを塗って硫酸銅・緑青の溶液で煮る「煮色」、米糠を塗って焼く「焼朱銅色」、製品を焼きながら米酢に鉄屑を入れ数年寝かせた溶



焼朱銅色を出す工程。米糠に薬品を添加したものを塗り、真っ赤になるまで焼く。表面の酸化皮膜を洗い落とし、研磨すると、赤褐色系の色と模様が生じる。



上写真の鉄漿の工程。



慈嶽堂の五具足。

液を刷りこむ「鉄漿」、数種類の薬品を使いながら、にわかに緑青を発生させる「青銅色」——台所にあるような身近な材料は意外ですが、経験で培われた化学であることを忍ばせます。家庭料理のように各工房や職人によって調合や発色が違い、時には門外不出の技として継承されてきました。そして今も、折井さんによって新たなレシピが生み出され、これまでにない金属の表情が誕生しています。

[写真] 浅川敏 (p.26下段右、p.27下段右)

化学を手技で極めるアート

文由閣の仏具

鑿子けいす——高岡銅器

シマタニ昇龍工房／島谷好徳@富山県高岡市
しょうりゅう しまたに・よしのり

法要には欠かせない鑿子けいすは、大きさが一尺以上にもなると、さぞかし重厚な器になろうと思いきや、意外にもその薄さは三ミリの繊細なものでした。それもそのはず。鑿子はひとつの楽器なのです。身体を突き抜けるような、澄んで深い音色を出すための伝承の技がありました。

おりんの大きなものを鑿子と言いますが、その音色には良し悪しがあります。鑿子の音は職人の間で、甲カン、乙オツ、聞モンと呼ばれる三つの音色が合成されたもの。それらの波長がピッタリと同調したとき、音は身体を突き抜け、心地良いものになります。この音色を出すためには、調律が必要とのこと。ピアノと同じく、鑿子は繊細な楽器なのです。

鑿子の形状は、叩き口のところだけ一〇ミリほどにぶ厚く、他は三ミリ程に薄い椀形をしています。ごく単純な形ですが、三つのパーツに分け、それらを合体して成形されます。素材は、銅と亜鉛の合金である

真鍮しんちゅう。口の部分は厚い延棒を鍛造して延ばし、輪にします。胴は長方形の薄い板をさらに叩き延ばしてこれも輪にします。底は薄い金属円盤を延ばして皿状に。三つを本体と同じ金属で溶接して、原形ができあがり。これを何度も叩き厚さと形を整えますが、金属は叩くと堅くなってくるので、その都度、焼き鈍なまして柔らかくしなければなりません。最後に調律を行ないますが正しい音色を覚えるのに一〇年ほどかかると言われています。現在調律ができる職人は片手で数えられるほどのこと。この先もずっと、技術が伝承されることを願う工芸のひとつです。



鳴り出し(音の調律工程)。混在する音色を整え、全体として正しく美しく「鳴る」ように、音を聞いては金槌で叩きながら調整してゆく。



鑿子の仕上げ工程。形を整えた後、さらに厚みを整え仕上げてゆく。

銅器を 楽器に 進化させる



慈嶽堂の鑿子。口径1尺3寸のサイズ。

焼き鈍し(なまし)。金属は叩いてると堅くなってくるが、焼くと柔らかくなり、金槌で叩いて再び成形しやすくなる。小さいサイズは炉に入れるが、1尺以上の大きなものはフタをした隙間からバーナーの炎を入れて回転させながら焼く。

文由閣の厨子・位牌壇

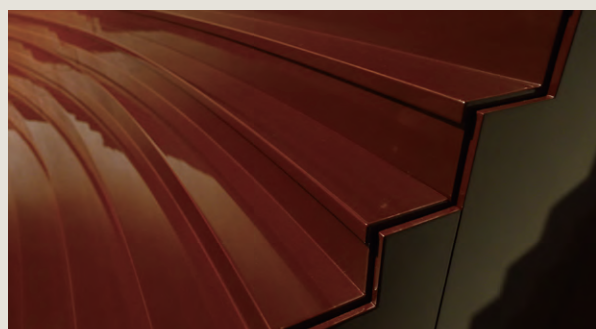
仏像厨子・位牌壇

わじまやぜんに
輪島屋善仁@石川県輪島市

輪島塗



龍樹堂位牌壇。



位牌壇端部。



龍樹堂全景。



龍樹堂前室と来場者を迎える地藏菩薩。

下地がしっかりしていて丈夫で剥げにくい。修理も効く。そうして広く知られてきた輪島塗は日本の代表的な漆工芸です。お椀や膳など器の銘品が店先を彩っていますが、ここではそのスケールをはるかに超えて、仏像の厨子や、部屋を包んでしまうほどの大きな位牌壇として実現しました。これほどのスケールの輪島塗は、かつてつくられたことがありません。輪島塗の最高技術が注がれた漆工芸の挑戦といえる作品です。



慈嶽堂の阿弥陀如来像と須弥壇、厨子。



慈嶽堂の厨子の基壇（部分）。

輪島塗史上最大級。

器の技術が次世代の空間を生み出す



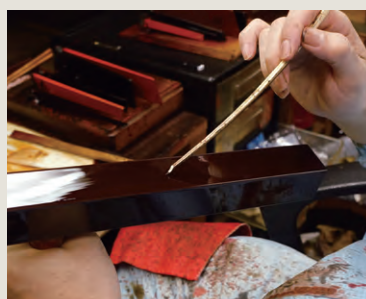
慈嶽堂経机パーツの上塗り工程。

文由閣では、位牌壇と仏像の厨子に漆塗りが施されました。輪島塗です。龍樹堂はこの位牌壇に丸く囲まれた部屋。普段は手のひらの上での器から感じる漆の存在感が、ここでは空間いっぱい広がっています。漆の麗しさ、瑞々しさに身体ごと包まれるのです。

輪島塗は、堅牢な下地づくりで有名です。木地に布着せして補強し形を整えて後、珪藻土を焼成した「地の粉」を混ぜた生漆を下地付けすること三度。塗って、乾燥させて、砥石で研ぐ。この工程が繰り返されます。さらに下地を堅く固めるための中塗り、上塗りへ進みますが、再び塗り、乾燥、研ぎが繰り返されてゆきます。塗りの回数は二〇〜三〇数回。工程の多さも輪島塗の特徴です。

器のスケールを超えた大作には高度な技術が注がれました。厨子の製作では、屋根、特に棟の柔らかな曲線（屋根面どうしの境は一回の研ぎで

ラインが変わるほど微妙な手技が求められます。一方、位牌壇の木地（木製本体）は、成形合板の「熟練技術」と切削機械の「コンピュータ技術」の両方が無ければ製作できなかったとのこと。伝統工芸の進化の賜物です。円形の位牌壇は六〇パーツに分割されましたが、その連結と納まりの詳細設計は何度も繰り返しされました。広くしかもカーブした面を均一に下地付けするには熟練が必要です。研いで形を整えるのですが、各段の高さを揃え、角を仕上げるのは容易ではありません。上塗りに至っては、この広い面で溜まりやムラをつくらず、漆の麗しい質感を残す刷毛さばきができる職人は限られています。また輪島塗は、前の工程が後の工程の質を左右する連携技。その流れを高度に監修できる工房も、今や数えるほどと言われます。日本の伝統工芸の最先端の姿がここにありました。



鳥の羽の軸でできた「フシ上げ棒」で微細なゴミを取る。



朱漆（ベンガラ系）による中塗りの工程。



ひな壇見付け部分の地研ぎの工程。



紙漉き/2人がかりで漉く。

文由閣の内装

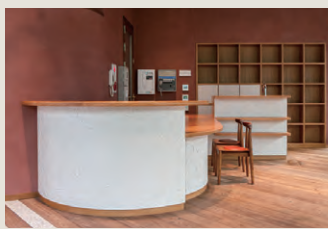
じゅうきまえた 什器前板—和紙

紙漉思考室／前田崇治@佐賀県唐津市

近代以来、その品質が世界的に再評価された和紙の技術が活かされます。伝統工芸でありながら、進化を続ける紙漉きが、今回新しい紙の相、質感や模様を見いだしました。それは、楮の繊維が現しになっている、荒々しい風合い。天然素材の生命力、活き活きとした力を感じさせる和紙です。

文由閣一階カウンターの前板には和紙が張られました。楮の繊維が残されて、独特な模様が浮き出た荒々しい風合い。今回のためにつくられた、オリジナルの紙の景色です。白い紙ながら、建物の迫力に負けない存在感を放ちます。耐久性が高いので、長く使って風合いの変化を楽しむものでもあります。

和紙産地のひとつ高知で修行し、地元唐津で製作する前田さんの手づくり和紙です。楮の若木を刈り取り、その皮を使いますが、簀漉くまでの原料の準備が作業時間のほとんどと言います。皮をへぐり(甘皮を取る)、煮て、流

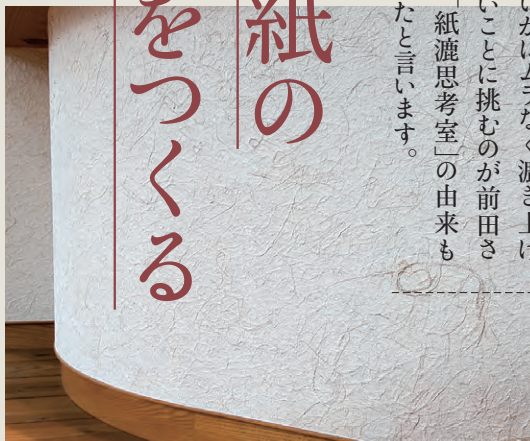


文由閣1階カウンター。

新しい紙の 風合いをつくる

水に晒してアク抜き。乾かぬうちに塵や異物を取るのですが、ここが一番根気のいる仕事。綺麗になった原料を、叩いて繊維をほぐします。ほぐしの程度で繊維の残り具合や風合いが変わるのです。「紙漉きは料理と一緒。どういう下処理をするかで、出来ばえが違ってきます。」

今回は二六六〇×一二七〇ミリの巨大な和紙がつくられました。紙を漉く簀桁も当然その大きさに合わせて。これをいかにムラなく漉き上げるか。新しいことに挑むのが前田さんの姿勢。「紙漉思考室」の由来もそこから来たと言います。



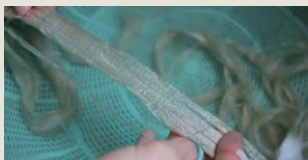
文由閣カウンター什器前板の和紙。新しい風合いが生まれた。



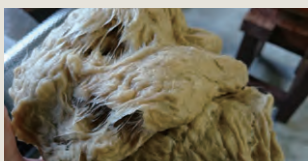
へぐり/外側の黒皮、甘皮(緑色の部分)を削ぐ。



晒し/一日流水に晒し、アクを取る。



ちり取り/異物や繊維のキズを取り除く。



打解・ほぐし/機械で打ち、ほぐす。



乾燥/天日干し。

[写真] 浅川敏 (p.30右列2点)

紙漉思考室 (p.30上および左列下4点)

前崎成一 (p.30左列上)

曹洞宗 萬亀山 東長寺「結の会」発足並びに「文由閣」建立記念

えこう

『回向——つながる縁起』展

文由閣建立を記念し、東長寺の新たな活動指針回向をテーマに、東長寺文化局P3（ピースリー）にて展覧会を開催致します。心を響かせる表現を介して、東長寺の思想と諸活動をご体感いただく、文化活動の新たな試みです。三カ月にわたり、多彩な表現者・研究者が集い、作品展示、トーク、音楽コンサート、ワークショップなどの五感で楽しむプログラムを展開致します。お誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。

* 内容の詳細、各イベント（事前予約制）の開催日・申し込み方法などは、同封のチラシをご覧ください。

【作品展示】

インゴ・ギンター氏による光の作品「Seeing Beyond the Buddha（佛院の向こうに観る）」をはじめ、映像表現や竹細工の技巧を活かした模型などを通して、東長寺の思想に触れて頂きます。

インゴ・ギンター（美術家、山城大督（美術家・映像ディレクター）、大橋重臣（別府竹細工伝統工芸士）、松野勉（建築家）、オノヨコ（美術家ほか



【コンサート】

普段は読経が響きわたる本堂に三組の音楽家が音を響かせます。バリガムランと能の共演、民族音楽から発想された参加型コンサート、そして先端テクノロジーによる音響空間。過去・現在・未来が交錯する濃密な三夜を、ご体感頂きます。

青柳拓次（音楽家）、GEM（音楽家・サウンドアーティスト）、ウロツテノヤチ（バリガムラン）+ 津村禮次郎（観世流能楽師）



© 写真：新津健秀

【トーク】

古来より先人の足跡、受け渡されてきた知恵が、私たちの生きる力となってきました。次代の創造に取り組み、美術家、研究者、写真家たちを迎え、彼らの編んだ「記憶の物語」に耳を傾けます。蔡國強（美術家）、蜂谷宗彦（志野流香道二十世家元継承者）、高梨直統（東京大学特任准教授・天文学普及プロジェクト「天プラ」代表）、石川直樹（写真家）



【ワークショップ】

文由閣の仏具や装飾に刻まれた伝統工芸家の「手仕事の記憶」。かつてあった紅葉川や畦の風景など、植栽計画のもとになった「土地の記憶」。文由閣にちなんだ二つの記憶に、実際に手を動かし、身体を動かして触れるワークショップです。

大橋重臣（別府竹細工伝統工芸士）、杉浦貴美子（ライター・写真家）



【開催概要】

会期：2015年7月11日[土]－10月12日[月・祝] | 開館日：毎週月・金・土・日 | 特別開館：7/14[火]－16[木]、9/22[火・祝]－24[木]

休館日：毎週火・水・木、8/14[金]－17[月] | 会場：東長寺文化局P3（ピースリー） | 時間：11:00－17:00 * 金曜日および夜イベント開催時は19:00までオープン

料金：無料 | 主催：東長寺 | 企画制作・イベント予約・お問い合わせ：東長寺文化局P3（ピースリー） | TEL: 03-3353-6866 | E-mail: johop3.org

【開催記念レセプション】

日時：2015年7月11日[土] 17:00－19:00

会場：東長寺文化局P3（ピースリー）

御挨拶：瀧澤遥風（曹洞宗萬亀山東長寺住職）、
芹沢高志（P3統括ディレクター）、インゴ・ギンターほか

ライブ：川村亘平・濱元智行 from 滞空時間

（バリガムラン・影絵）



東長寺より徒歩1分。
向かいのアネックスビル1F。
詳しくは左の地図を
ご参照下さい。



尊厳ある死と両墓制 一井上治代「東洋大学教授」

戦後の東京に生まれた私にとって、高度経済成長を肌で感じたことといえば、小学校へ通う途中の田んぼがすべて団地に代わったことだ。すぐさま分校ができ、それもまたあつという間に独立した小学校になった。若者の人口移動はすさまじい数だったのだなあと、今思えば感慨深いものがある。

戦後の高度経済成長期に農村から都会へ仕事を求めて移動し、結婚して核家族をつくった人たちが高齢期にさしかかったのが一九九〇年ごろ。そのころ浮上した問題は、故郷の墓をどうするか、墓を継ぐ子どもがいない、などである。そこで私は一九九一年に「現代版・両墓制」というシステムを提唱した（一九九一年七月二六日読売新聞掲載）。遺体を埋葬する「埋め墓」と、死者の霊を祀る「参り墓」の二つの墓をもつ両墓制が、現代の墓問題を救うと考えたからだ。つまり、親の遺骨は慣れ親しんだ故郷の墓に埋めるが、一方で、子どもや孫世代のために墓参が容易にできるよう、都会に参り墓をもつという形態である。

ただしそのシステムが成り立つためには、一人の人間の死後の墓であるから、埋め墓と参り墓の運営者間に連携が取れていなければならないことや、墓の使用料が安価であること、継承を前提としない墓であることが条件となる。跡継ぎが必要だったり、檀家とならなければならない墓では、墓を二つもつことがかえって負担となり、実現不可能であるからだ。

この両墓制を成り立たせている日本人の死生観について触れてお

きたい。私たち日本人は、死者に対して死後何年にもわたって祭祀を行なってきた。それはなぜか。文明国家のもとで生活している私たちは、人間の遺体の段階的変化を目の当たりにすることはほとんどない。ところが大昔は、次第に腐敗していく死者の変化を目にしていたに違いない。愛おしい人が亡くなって「哀惜の情」を感じながらも、その身体にはすぐにも変化が露われ、その愛おしいはずの人が恐ろしく「穢れた」ものに変化していく。この相容れない二律背反の感情に、古代の人はどう決着を付けたのだろうか。

それが「霊肉分離」という考えである。肉体は朽ちるが、人の霊魂は遺体から遊離する。さらに死んで間もない霊魂は、不安定で荒ぶれているが、それを子孫が長期にわたって祭祀すること（年忌がこれにあたる）によって、死霊は子孫を加護するような祖霊に昇華すると考え、これを祖霊信仰という。この祖霊信仰を下地に、仏教による意味づけによって今日の私たちが行なっている葬祭儀礼が形づくられていった。この霊肉分離の考えを裏付けるものとして「両墓制」がある。両墓制は近畿地方を中心に広がり、今でも残っている地域がある。

近年、故郷にある墓をたたんで、子世代の居住地近くに墓を引っ越してくる改葬も増えているが、生まれ育ったところに死後も眠りたいという人も多い。尊厳ある死と葬送の実現のためには、現代版・両墓制は、「自分らしい葬送を生前に準備する」時代にふさわしい選択肢の一つと言っているだろう。

いのうえ・はるよ

東洋大学教授・社会学博士。尊厳ある死と葬送の実現を目指して活動する認定NPO法人エンディングセンター理事長。エンディングデザイン研究所代表。主な著書に『最期まで自分らしく』（毎日新聞社）、『墓をめぐる家族論』（平凡社）、『新・遺言ノート』（KKベストセラーズ）、『墓と家族の変容』（岩波書店）、『子の世話にならずに死にたい』（講談社）、『より良く死ぬ日のために』（イーストプレス）、『桜葬』（三省堂）ほか多数。

新しい技術と寺院建築―五十嵐太郎「東北大学教授」

歴史を振り返ると、そもそも日本において寺院建築は、最新のテクノロジーとともに導入された。六世紀に仏教が伝来し、七世紀の法隆寺は五重塔を出現させたが、当時の街並みからすれば、驚くべき高層建築だったと思われる。また中世に禅宗がもたらされると、設計手法とともに禅宗様の建築が広がった。そして奈良の東大寺は、中国から新しい建築の構法として大仏様を採用することで、巨大な空間を実現し、南大門にその威容が残る。神社建築が変わらないことをアイデンティティとしたのに対し、近代以降も寺院建築は積極的に変化を受け入れた。伊東忠太^{いとう・ちゅうた}「1」は、たとえ燃えやすくても、神社は木造であるべきだと論じるようになった。なお、彼はインド様式の築地本願寺（一九三四年）を設計している。仏教の起源をさかのぼって、インドの思想やデザインを精密に研究するという姿勢自体、近代ならではの発想と言える。

神社とは対照的に、大正時代や昭和の初期、寺院は耐火耐震の建築に進化すべきという論客が現れた。たとえば、幸田露伴は社会が変わると、畳敷きが減り、腰掛け式が増えるとして述べている。また興味深いのは、当時、公共施設という概念が寺院建築に重ね合わせられたことだろう。現代日本の寺院については、建築史家の横山秀哉『コンクリート造の寺院建築』（一九七七年）のほか、石田陽是^{あきよし}や丸井堂^{たかつく}嗣らの研究がある。これらによれば、コンクリート造の場合、二〇世紀の半ばには陸屋根と伝統型の事例が拮抗していた。また一九八〇年代の後半から、コンクリート造の建設数が木造を上回るようになったという。不燃化、建設の現代化と合理化、デザインの多

様性が進んだからと思われる。すなわち、寺院建築は、保守的な神社と違い、新しい素材を用いながら、伝統的な表現を模索している。

すでに半世紀以上の歴史をもち、コンクリート造の寺院も新しい伝統として国指定重要文化財に指定されている。建築家による前衛的なデザインも少なくない。いくつか紹介しよう。愛知県では、山崎泰孝^{やまざき・やすたか}の善光寺別院願王寺（一九七六年）は鉄骨造の大屋根が木造を包むハイブリッドな空間、吉村英孝^{よしむら・ひでたか}の西光寺本堂（二〇〇五年）は積み木のような外観と明るい内部空間が特徴であり、間宮晨^{しん・い}一千による笠寺の真光寺は、抽象化されたRC造の山門から続くガラスのスリットが建物を切断し、上から光が注ぐ。竹山聖^{たけやま・せい}の新宿瑠璃光院白蓮華堂（二〇一四年）は丸みをおびた大きなオブジェのような。玉置順^{たまき・しゅん}が手がけた深川不動堂（二〇一〇年）は、ダイナミックなイベントの舞台をもつ。宮本佳明^{みやもと・かつひろ}の澄心寺の庫裏（二〇〇九年）は、シンボリックなコンクリートの大屋根が特徴である。言うまでもなく、東長寺の檀信徒会館・文由閣も、環境、構造、デザインという各分野から現代の叡智を集結させた新しい建築だ。寺院建築はたんに過去を見せる博物館ではない。木造の時代に完成した造形にとどまらず、今なお建築の可能性を追求しているのは、まさに宗教が現代に生きているからだろう。

1 ― 建築家・建築史家。平安神宮、築地本願寺、湯島聖堂など神宮や仏教関係の設計を数多く手掛けた他、法隆寺が日本最古の寺院建築であることを学問的に示し、日本建築史を創始した理論家としても知られる。一九五四年没。

いがらし・たろう

建築史・建築批評家。1967年生まれ。1992年、東京大学大学院修士課程修了。博士(工学)。現在、東北大学教授。あいちトリエンナーレ2013 芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナーを務める。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。『現代日本建築家列伝』（河出書房新社）、『被災地を歩きながら考えたこと』（みすず書房）ほか著書多数。

山内行持／イベントおよび教室のご案内（平成二十七年七月―九月）

フリーダイヤル
0120-3351-850は
昨年末にて停止致しました。
ご了承ください。

【山内行持のご案内】

お盆・棚経のご案内——ご自宅でお盆供養しませんか

7月13日は、迎え火を焚いて、先に逝った方や、先祖を自宅に迎える日です。盆棚にはマコモの筵むしろを敷き、お位牌の前には、新鮮な季節の野菜や果物などや、ナスやキュウリで牛や馬をつくってお供えします。そして、菩提寺の和尚さんに来て頂き、お盆のお経をお願いします。お供えした食物と同じものを食べながら、16日の送り火までの間、先に逝った方たちと時間を過ごす……。古くから伝わるお盆のご供養です。僧侶を招いて、自宅でお盆供養をいとなみたい方は、お電話でお申し込み下さい。時間調整の上、お伺い致します。なお、8月10日〔月〕～17日〔月〕の「月遅れのお盆」期間はお伺いできません。詳細は、寺務所までお願い致します。

・お申し込み・お問い合わせ（午前9時～午後5時）
東長寺事務局…03-3334-1974

【イベントのご案内】

仏教文化講座

元日を除く毎月1日は、羅漢堂にて左記の要領にて仏教文化講座を開設しています。

檀信徒のみならず、広く一般の方にも参加していただけますので、お問い合わせの上、来山下さい。なお、参加費は無料です。

・毎月1日 開場…午後4時半／開講…午後5時

・8月1日〔土〕 「高岡の工芸について」 島谷好徳〔シマタニ昇龍工房〕・林口砂里〔エビファニーワークス代表〕

・9月1日〔火〕 「能登の工芸について」 遠藤毅〔建具の遠藤代表〕・安藤五十治〔輪島屋善仁デザイン室長〕

縁の会―新盆回向のご案内

故人が亡くなられて、最初に迎えるお盆が新盆です。亡くなられてから初めて、故人がご家族のもとへ帰っていらつしやる期間ですので、多くの方がこの新盆を一周忌と同じように大切にされています。ご自宅で精霊棚を用意するのは難しくなりましたので、代わってお寺でお迎えし、故人をご供養致します。当山での回向の後、故人とともにご自宅へお帰りになりお盆をお過ごし下さい。本年度の新盆のご回向は、左記の日程となっております。ご希望の方は、お電話にてお申し込み下さい。

・日程…7月9日〔木〕・10日〔金〕・11日〔土〕・12日〔日〕
・時間…各日とも午前10時～午後3時半 ※30分単位でお受け致します。
・お申し込み・お問い合わせ（午前9時～午後5時）
縁の会事務局…03-3335-6874

【各種教室のご案内】

坐禅会

- ・毎週土曜日（8月はお休み）
- ・時間…午後6時—午後7時半
- ・服装…坐禅を行ないやすい服装

写経会

- ・毎月第2・第4木曜日（8月はお休み）
- ・時間…午後2時半—午後3時半
- ・持物…手になじんだ小筆があればご持参下さい。

お経の唱和と経典講読の会

お経の指導と経典講読をしております。今期は「修証義」を学びましょう。実生活に照らし合わせながら、仏教徒としての生き方を摸索したいと思います。

- ・毎月第3金曜日
- ・時間…午前11時半—午後1時
- ・参加費…一、〇〇〇円
- ・会場…東長寺本堂

折り紙教室

- ・講師…湯浅信江先生「お茶の水おりがみ会館」
- ・7月16日〔木〕9月17日〔木〕（8月はお休み）
- ・時間…午後2時より
- ・受講料…三、〇〇〇円「材料費・お茶代込み」
- ・会場…カフェ「きあん」

水彩画同好会

- ・7月9日〔木〕・27日〔月〕
- ・8月24日〔月〕
- ・9月10日〔木〕・28日〔月〕
- ・時間…午後2時より
- ・参加費…一、〇〇〇円
- ・会場…カフェ「きあん」

碁縁の会「囲碁の会」

- ・7月9日〔木〕・23日〔木〕
- ・8月13日〔木〕・27日〔木〕
- ・9月10日〔木〕・24日〔木〕
- ・時間…午後1時より
- ・会場…カフェ「きあん」
- ・連絡先…
- 042-563-0634〔担当員〕
- 042-467-3081〔担当三橋〕

長麺会「そば打ち同好会」

- ・7月27日〔月〕・9月28日〔月〕
- 8月はお休み
- ・時間…午前10時より
- ・参加費…一、五〇〇円
- ・会場…東長寺一階 食堂
- ・連絡先…
- 042-557-4632〔担当横山〕
- 042-942-3930〔担当舟木〕

観世流謡曲教室のご案内

- ・講師…中島志津夫先生「観世流能楽師」
- ・7月2日〔木〕・9日〔木〕
- ・8月20日〔木〕・27日〔木〕
- ・9月10日〔木〕・17日〔木〕
- ・時間…午後1時半より
- ・受講料…六、〇〇〇円〔月毎〕
- ・会場…書院二の間

うたごえ茶房 ユリかご

- ・8月3日〔月〕・9月7日〔月〕
- 7月はお休み
- ・時間…午後2時より
- ・参加費…五〇〇円「ワンドリンク付」
- ・会場…カフェ「きあん」

仏教讃歌を歌う会

- ・指導…高部さち先生「藤原歌劇団準団員・ボイストレーナー」
- ・毎月第3金曜日
- ・時間…午後2時—午後4時
- ・参加費…一、〇〇〇円
- ・会場…東長寺本堂

募金活動報告

春彼岸会チャリティーバザーの売上上げは、23万875円となりました。お買い上げいただいた方はもちろんのこと、ボランティアスタッフの方々や手づくりの作品をご提供下さった方、寄付を下された方等々、多くの皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。また、花まつりの際には、アンサンブル・ラッシュのメンバー、蕎麦打ちの会、三崎由記子さんのご協力により、8万3500円の募金が集まりました。お預かりしました募金の使途につきましては、現在、慎重に協議を進めております。次号『萬亀』にてご報告できますよう努めて参ります。

檀家一護持会総会のご報告

5月26日〔火〕12時半より東長寺本堂において、本年度護持会総会が開催されました。すでにお檀家さまには会計決算書が届いていることと存じますが、平成26年度決算報告並びに平成27年度予算案、ともに承認されましたことを、ここに報告申し上げます。

住職より、昨今の核家族化、少子化などによる後継者問題等をふまえ、当山として、これからの墓地継承問題に対応していけるよう考えていきたいとお話がありました。また、恒例の山門大施食会にも、多くの檀信徒の皆さまにご焼香を頂きました。

護持会会計 土屋之光

【ご報告】

盂蘭盆会法要

本年度の盂蘭盆会法要は、下記の通り厳修致します。
万障お繰り合わせの上、
御参詣ならびに御焼香下さいますよう御案内申し上げます。

記

7月13日[月]	10:30	第1座	檀家・縁の会
	11:30	第2座	檀家のみ
	12:30	第3座	檀家・縁の会
	13:30	第4座	檀家・縁の会
	14:30	第5座	檀家・縁の会

※本年より第5座までとなりました。

お塔婆のお申し込み

もうすぐお盆です。お盆の合同法要の際には、一週間前までに、手紙、電話、FAX等にてお申し込み下さい。お申し込みの際には、お亡くなりになった方の俗名あるいは戒名と、お申し込みになる方(志主)のお名前をお知らせ下さい。

・お申し込み・お問い合わせ(午前9時～午後5時)：東長寺寺務局

〒160-0004 新宿区四谷4-34 | TEL: 03-3341-9746 / FAX: 03-3341-2150



曹洞宗 萬亀山 東長寺
160-0004 東京都新宿区四谷4-34
(代 表) 03-3341-9746
(縁の会) 03-3353-6874
(結の会・文由閣) 03-5315-4015

<http://www.tochoji.jp>

(リニューアルオープンしました)